

朴の花のその圓^まけきを見つつゐて涙のいづる
 までになりたり

わがひそむこの山中に筒どりのこゑの近きと
 稍^{ちよ}にとほきと

うつくしき聲に啼く鳥はうけたるこゑに啼く
 鳥おのおの聞こゆ

藏王より南のかたの谿^{たに}谷^やに初夏^{しよか}のあさけの靄
 たなびきぬ

たたかひの劇しき時に茱萸^{ぐい}の花むらがり咲き
 て春ゆかむとす

郭公と山鳩のこゑきこえ居^まる木立^{こだち}の中に心し
 づめつ

かたまりし丹のつつじが春あらし吹き居る山
にゆらぎて止まず

せまりたる時の真中にいそがしく黄の花
ふ松の花より

ひむがしゆ下りくだりて幾川は金瓶村のあひ
を流るる

さびしくも聞ゆるものか現身の吾をめぐりて
杉木立風

握りたる飯を食はむと山のべにわが脚を伸ぶ
草鞋をぬぎて

しかすがに色きよき蟲匍ひ來り手帳の上に暫
したためらふ

あらがねの土を照らせる天つ日を稚かりし日
の如くに見たり

藏王山蔵王山その全けきを大君は明治十四年あふぎ
たまひき

松はらのしげりの奥おくはとほし峽かきを隔てて
なほしげり山

石原を遠くたもちて流れたる山川やまがはみれば心和こころな
ぐもの

のぼり來こし高きによりて若葉かせ浪だつ山を
今し見おろす

夏なつされば雪消ゆきわたりて高高たかたかとあかがねいろの
藏王蔵王の山

はるの陽はやうやく低くあをあと北の方と
ほき國原きらふ

葦切の啼くこゑ聞けば五十年の過去の一時や
よみがへりたる

この村にのがれ來りてするどくも刹那を追は
む六十四歳のわれ

みちのくの春逝く山のふところに白く散りた
る大根の花

またたびの花たづねゆく川原ぎし酢川はここ
に堰かれつつあり

のがれ來てはやも百日か下畑に馬鈴薯のはな
咲きそむるころ

實はつになれるたん 菠蓐さう草さうに朝あな朝あなひら 鶉ひらが来きりて食はみ
こぼしけり

豇豆ささげ畑はたの雜あ草らとるとあまつ日の入りたる後に
連つれられて来きつ

十右衛門が手入をしたる玉葱の玉あらはれて
夏は深まむ

さみだれは二日降りつぎか蠶さらの繭まごもらむ日
すでに近づく

朝々はすがしくもあるか北庭きたにやうに雀すずめあらそひて
松の皮おとす

藻ものなかに鯉こいのやからの眠かるべくこのしづけ
さを鯉こいたもたむとすや

蟬いまだ鳴くこともなく山中の土の平に蟻蚶
飛びいづ

疎開者の家族氣狂ひになりたれば夜のあけあ
けに往診したり

みづからの産卵せむと土を掘る蟲のおこなひ
微かなりとも

土ごもりをはりし甲蟲は雌蟲にてこもれる後
はわれかへり見ず

日もすがら雨をもよほす空合ををりをり見を
りこころ憂ひて

戦歿の二たりの遺骨むかへむと半郷道にわれ
の汗いづ

豊後梅と稱する梅の大き實が寶泉寺よりとど
きてゐたり

あひ繼ぎて警戒報のこだまする山の麓をわれ
行かむとす

この部屋の塵埃の中に生れゐる蚤の幼蟲をい
くつかころす

アツツ島に命おとししこの村の一人勇士には
遺髪さへなし

美しき斑を持ちながら夏ふけて梅の木の葉を
食ふ蟲のあり

診察の謝禮にもらひし雞卵を朝がれひのとき
十右衛門と食ふ

海上にありて打ちたる砲の音藏王を越えてひ
びきてきたる

つづけざまに窓にひびきて陸中の釜石をうつ
艦砲射撃

ねむの花咲くべくなりて山がひにわれの憂ひ
の深くもあるか

疎開漫吟 (三)

この村の小さき園に蒐ひゆといふ草はしげりて秋
は來むかふ

たかだかと唐たうもろこしの並みたつを吾は見て
をり日のしづむころ

状勢は深刻となりくにあげて聲のむと、きにわれも黙さむ

山形地区を北上する爆撃機たちまのうちに聞きすごしけり

蚤ひとつ捉ふるにも力をそそげりとわれ若しいはば罵られむか

仙臺の部隊に入りし老兵が炎をあびし夜のものがたり

たたかひのため穉らの競ひたる路傍の豆を見つつ歩めり

はらばへになりて暫らくわがゐたる壘の上に蚤のむくろひとつ

北方ほくほうににぶき投弾とうだんの音きこゆ山形市街かなほ
も遠きか

八月の十日を過ぎてみちのくの金瓶村に蟋蟀こほろぎ
鳴くも

おちつかぬ朝餉あさぐれひにて石噛みし齒をいたはりて
山のべに來し

すき透らむばかりに深きくれなるの松葉牡丹
のまへを過ぎりぬ

たのまれてたまたま薬あたへたるそのおほむ
ねは貧しく疎開せりけり

麥飯むぎいひの石をひろふは夜ぶすまゆ蚤捉むしとらふるに豈
おとらめや

夜もすがらわれの體からだを襲ふ蚤朝くらがりには
 やも逃げゆく

蟬のこゑしげくなりたるきのふけふこの身は
 懈たふし堪へがてなくに

新島にじまゆ疎開せる翁おきなとつれだちて天皇のみこゑ
 ききたてまつる

停戦はたいのち五日この村の畑はたけのほとりにわれは
 休らふ

秋たちてうすくれなるの穂のいでし薄すすきのかげ
 に悲しむわれは

よわき齒に噛みて味はふ鮎あせふたつ山の川浪く
 ぐりしものぞ

かすかなるわれの命の過ぎなむもこの山河よ
さきくありこそ

天なるや日てりそめたるころに來て小松のか
げに心しづむる

山のべの茂みが中に藜栗もやうやく固く秋づ
かむとす

桔梗の過ぎむとぞするこの山にけふ入りて來
つつぎて來べしや

鈴蟲のこもりて鳴ける萱むらにわれは近づく
このゆふまぐれ

すでにして山道くれば新しく栗のいがおほく
落されてあり

墓はらの日向に咲きてにほへどもいまだも低
きさるすべりの花

戦ひのをはりとなりし秋にしてかすかなる村
の施餓鬼おこなふ

白萩は寶泉寺の庭に咲きみだれ餓鬼がにほどこ
すけふはやも過ぐ

松原の中にし入ればふかぶかとしたる苔あり
こころ安けく

さやけくもはだらになりしくれなるが藏王つ
づきに見えわたりたる

この見ゆる藏王の山の前山のはだらの紅あけに雲
は移ろふ

新島より疎開してゐし一家族言葉すくなくか
へりゆきたり

いきほひて水かさまされる秋川は日の入りぬ
ればおと高まりぬ

齒醫者まで通はむとしていそぐとき藏王の山
は隠るひにける

わが枕ゆるるが如く夜もすがら水嵩まされる
川おとぞする

つゆじものしとしと置く今朝の朝けここに
遊びし蛇もひそみて

おのづからわが吐く息の見えそめて金瓶むら
の秋ふけむとす

朝寒ともひつつ時の移ろへば蕎麥そばの小花に來
る蜂あり

ひとつある岡にのぼらむと思ひけり野分すぎ
たるけさのあかつき

南より村を貫くこの川は洪水おほみづとなりながれさ
かまく

西南せいなんの方にこごれる雲みつつ秋はふかしと思
ひけるかも

こがらしは吹くべくなりてこの村の櫓たもとの木原きはら
に青き繭さがる

ふかぶかとひむがしにして雲かかる藏王のも
みぢはやもすがれむ

稻を刈る鎌音かまねきけばさやけくも聞こゆるもの
 か朝まだきより

金瓶の橋をわたりて黒澤へわが向ふとき日は
 傾きぬ

この村のしぐれの雨はあはれあはれ藏王高は
 らに流らふる雪

朝雲は山のごとくにそばだちて羽前はつぜんのくにの
 秋ふけむとす

大河おほなほのほとりに立てばおもほえず鳥海山に雪
 を降りける

大高根山おほたかねのもみちにこのゆふべ大旗おほしなして雲
 ぞちかづく

やぶからしの玉もやうやく色づきてその紫も
愛づべからずや

水せまる岸のなぎさにたむろして草もみぢせ
りかなしきままでに

みちのくの最上川べの大石田にわが齒は瘡いえ
てすがしこの朝

わたつみの海よりのぼり來し鮭を今ぞわが食
ふ君がなさけに

みづうみに似し静けさを保ちたる最上の川は
見らく飽かなく

おごそかに北へむかへる最上川ここの平たひらはた
ぎつことなし

金瓶村小吟

桑の實はやうやく黒しのがれ来て感冒もせず
われは居りしに

夏至すでに過ぎたることをおもひいで藏王の
山をふりさけにける

朝な夕な吾はおどろく入りかはりたちかはり
くる鳥の多きに

椋鳥ははやも巢だちて岡べなる胡桃の花も過
ぎむとぞする

しづかなる時代のごときころにて白き鯉こ
の水にあぎとふ

ふりつぎし雨はれしかばあなさやけ最上だひ
らゆ雲の峯みゆ

月山ぐわっさんもゆふぐれゆきて北とほくくれなるの雲
たなびきにける

ほがらほがら月あかくして一しきり近き山べ
にふくろふ啼けり

つくよみの光明あかけばたたかひのきびしき代と
ぞ起きて來にける

空襲の二日つづきて雲凝りしここのあがたの
山に日の入る

ゆふばえの紅くれたるにしてすぢひくをふりさけゐた
り空襲すぎて

こゑながく鳴きをはりたる蟬ひとつ暫しはる
たりこの梅の樹に

一むらの萱かやかげに来て心しづむいかなる老おいを
あれは過ぎむか

いつにならばわれこの村を去りなむかゆふぐ
れむとする川原かはら蟋蟀こほろぎ

ものなべてしづかならむと山かひの川原の砂
に秋の陽のさす

白雲は南にひろくうつろひてまどかなる月今
ぞかがやく

秋のかせ吹くべくなりて夜もすがら最上もがみの川
に月てりわたる

まどかなる月の照りたる最上川ひむがし南よ
り流れて來る

みちのくの村にかすかに吾をりて秋の彼岸の
山に入りゆく

秋雲は月山のうへにこごりたり夕ぐれにして
うつろふらむか

おもおもと水のながるる音のしてここの川原
に蟋蟀鳴くも

かたはらに人のつれなき吾ひとり山べの道に
涙しながる

たたかひのをはりたる代に生きのこり來向ふ
冬に老いつつぞある

このくにの空を飛ぶとき悲しめよ南へむかふ
雨夜かりがね

石の上に羽を平めてとまりたる茜蜻蛉も物も
ふらむか

ぬばたまの夜はすがらにくれなるの蜻蛉のむ
れよ何處にかねむる

ひそかなる吾の足音におどろけり桑のはたけ
の黒蟋蟀は

夏雲の中にかづちのとどろきの稀なりし年
とおもふも寂し

いつしかに黄にほひたる羊齒の葉に酢川の
水のしぶきはかかる

漆の葉からくれなるにならむとす秋の山への
にほひ戀しく

ここに啼く小雀ひとつもあはれにて苔の水べ
に來れるらしも

むらさきににほひそめたる木通の實進駐兵は
食むこともなし

たむろには紫がかる葉もありてわが目のまへ
にこがらしが吹く

西の方ははざまに朝の雲しづみ月山のうへの
細真澄空

月山の膚きびしく色づくを見れば一夜に雪ふ
るらむか

最上川おほどかにして流るれど支流のさやぎ
 ここにはじまる

おごそかに水嵩みかさまさされる最上川ひとときわれ
 にむかひて流る

秋の鳥とり最上川べに啼きつぐをわれは樂たのしむ歩
 みとどめて

あめ晴れし最上川のうへにためらはす流るる
 水泡みなわ見れども飽かず

みづうみの如くしづけき最上川その兩岸もろぎしは既
 に高しも

いくたびか立ちあがりけりこの部屋の秋の蠅
 ひとつ殺さむとして

星^{ほし}空^{ぞら}の中^{なか}より降^ふらむみちのくの時^{とき}雨^{あめ}のあめは
 寂^{さび}しきろかも

いでゆきて壘^うのうへに持^もてきたる南^{なん}蠻^{ばん}鐵^{てつ}色^{いろ}の
 柿^{かき}の葉^はひとつ

いそぎつつ川^か原^{はら}わたればおもほえず月^{つき}山^{やま}のか
 たに時^{とき}雨^{あめ}虹^{にじ}たつ

金^{かな}瓶^{かめ}の木^き原^{はら}いで入^いる人^{ひと}見^みえて藏^{そう}王^{わう}白^{しろ}くかがや
 きわたる

天^{てん}保^ぽの代^{しろ}に餓^う死^じにしものがたり今^{いま}も悲^{かな}しく語^{かた}
 りつたふる

くやしむ言^{こと}も絶^{こと}えたり爐^ろのなかに炎^{ほのほ}のあそ
 ぶ冬のゆふぐれ

こがらしの山をおほひて吹く時ぞわれに聞こゆるこゑとほざかる

山々は白くなりつつまなかひに生けるが如く冬ふかみけり

うつせみのわれの横たふ臥處にも蟲來すなりて年くれむとす

岡の上

すがしくも胸門ひらけばこの縣の稻の稔りを見て立つわれは

くさぐさの實こそこぼるれ岡のべの秋の日ざしはしづかになりて

あららぎのくれなるの實の結ぶとき淨けき秋
のころにぞ入る

沈黙ちんもくのわれに見よとぞ百房ひやくぶさの黒き葡萄ぶどうに雨ふ
りそそぐ

こゑひくき歸還兵士きげんへいしのものがたり焚火たきびを繼が
むまへにをはりぬ

大きなる河のうねりの見ゆるころ水嵩みかきまさり
ぬとわれはおもへる

松かせのつたふる音ねを聞きしかどその源みなもとはい
づこなるべき

新しき歩みの音のつづきくる朝明あさあけにして涙の
ごはむ

秋のみのり

すめらぎの大御心の安らぎをもろともにこひ
奉るのみ

秋晴のひかりとなりて楽しくも實りに入らむ
栗も胡桃も

あさ早く颯風來の警報を聞けばなまぬるき風
ふききたる

灰燼の中より吾もフェニクスとなりてし飛ば
む小さけれども

颯風の遠過ぎゆきしゆふまぐれ甘薯のつるを
ひでて食ひつも

遠のひびき

秋風の遠とほのひびきの聞こゆべき夜ごろとなれ
 ど早く寐いねにき

ひむがしに直ただにい向ふ岡にのぼり藏王ざうおうの山を
 目守まもりてくだる

たたかひにやぶれし國の山川を今日ふりさく
 と人に知らゆな

いばらの實赤くならむとするころを金瓶かなびん村むらに
 いまだ起き臥す

空ひくく疾風はやかぜふきすぎしあかときに寂しくも
 わが心ひらくる

柿落葉

よの常のことといふともつゆじもに滯れて深
 深し柿の落葉は

やうやくに友より來る文よめばなべては悲し
 現身ゆゑに

十月二十五日あさ藏王に雪ふりたりといふこ
 ゑぞする

わが心しづかになれど家限の茗荷黄いろにう
 らがれわたる

石見にて老ゆる翁おきなに鴨山の説をつたへていざ
 こよひ寝む

霜どけ

左千夫先生大正二年にみまかりてかかる事を
知りたまはざるなり

霜とけてしづくするおと朝なさなここに聞け
どもはかなきものか

明治十五年われこの村に生れいで六十四歳の
年ゆかむとす

ひとたびはここにうねりし最上川みづがね色
にふくれつつ見ゆ

いたいたしき時代ときなれどもまなかひに君が面
影いやあざやけし

百穂書伯十三回忌

殘生

すでにして藏王の山の眞白きを心だらひにふ
りさけむとす

一日すぎ二日すぎつつ居りたるにいつの頃よ
りか山鳩啼かぬ

うつせみのわが息息を見むものは窗にのぼれ
るかまきり蟬せみひとつ

のがれ来てわが戀しみしはし蓼栗もあけび木通もふゆの
山にをはりぬ

夜な夜なは土もこほりぬしかすがにたぎつ心
をとどめかねつる

あかがねの色になりたるはげあたまかくの如
くに生きのこりけり

來む春に穴をいつらむくちなはがこの土の上
に何見るらむか

もろともに叫びをあげむくれなるの光に浮ぶ
ひむがし見れば

寒 靄

寒靄のたちのおぼろにわたり鳥群れつつ飛べ
ば吾はよろこぶ

ひむがしをふりさけみれば雪暴れむ藏王ぞこ
もる黄雲のなかに

とほどほし國の平たひらの隈くまもおちず霜しもぐもりして
朝あけわたる

ためらはむ暇いとまさへなしたまきはる命いのちのまにま
奮ふるひて立たな

最上川流らふ國はゑな清きよけありあけの月つきひく
くかがやく

冬至

あまぎらし降りくる雪ゆきのをやみなき冬ふゆのはて
の日ひこころにぞ沁しみむ

降ふる雪ゆきはみなぎりながら中なか空ぞらに天あまつ日ひ白しろくあ
らはるるなり

目のまへの相すがたとなれる悲劇ひげきさへ空あなしきごとく
年ゆかんとす

いつしかに運めぐりきたれる一年いちねんの最短さいたんの日に居
りてかなしむ

時により競きまひたたむとせしかども衰おとろふるなり
この年のくれ

うつたふる心動こころうごきもなくなりて冬至とうじの夜よをは
やく寐ねにけり

穴あなごもるけだもののごとわが入いりし臥處ふしどにて
ものを言いふこともなし

この村にのがれ來し年の冬至とうじの夜よこほらむと
してしばし音斷ねつだんゆ

氷柱

雪つもるけふの夕をつつましくあぶらに揚げ
し干柿ほしがきいくつ

目のまへに並ぶ氷柱つららにともし火のさす時心あ
らたしきごと

みちのくにありて思へどとりがなく東あづまの山も
雪ふるらむか

おもふどち相集りてけふ居れば一つの歌もお
ほろかならず

釋をさなかりし頃しのばなと此ゆふへはつき帰ぐさの實わ
れに食はしむ

獨坐

いかならむ人に見よとかあわたた慌し註文のうた幾つ
もつくる

新聞に銀座どほりの寫真ありその歩道ほだうには人
みちみちて

北國きたくにの空さだめなく南よりくもりとどきて雪
ふりやます

たたかひの終末しゆうまつちかくこの村に鳴りひびきた
る鐘をわすれず

火をいはば大正十三年昭和二十年たちまちに
して吾が書籍しよせきをほろぼしぬ

昭和二十一年

天地はあらたになりておもふどち相寄りた
たむ苦しかりとも

あまのはら亂れむとするものもなくほがらほ
がらと朝明けわたる

新
春

山々に雪ふりつもりしろがねの光を放つおご
 そかを見よ

あめつちに陣痛ありとおもほゆるこれの時代
 に生きむとぞする

勅題の歌さながらに雪かむる松の下びに雀む
 れたり

日 向

國土くににひくくしづめる冬の靄あやゆふぐれむとし
 て動くにかあらし

しづかなる冬の日向ひなたにいださるる清きよけくも白
 き豆くろき豆

新しく興れ興れと叫ぶこゑ老いたるわれをゆるがして過ぐ

いつしかも年めぐり來ぬ新しき年といへどもわれは苦しむ

かくのごと雪は流らふものなべて眞白きがうへになほし流らふ

籠居

雪つもる村にひそみて吾が居れど都のなかの叫びきこゆる

寒の寒くひをはりたるひと時をこの世の話聴かむとおもひし

戦地よりいまだ歸らぬ三人子をしのばむとし
て薪木つぎたす

黄になりて地に伏したりし紫萼に三尺あまり
の雪はつもりぬ

をやみなく雪降りつもる道の上にひとりごつ
こゑ寂しかるべし

雪しづく

日の光一日かがよひ太杉のしたにあまねく雪
しづくする

まどかなる雪のおもより照りかへす光にむか
ひ歩みとどめつ

うつくしく降りたる雪を眞少女のごとしとい
ひて讚めつつぞ居る

雪ふれる川原かはらに來り歩むときゴムの長靴歩み
なづめり

冬川のみぎはの砂に寄る波の雪にさやれば雪
はつもらず

松上雪（二）

高松の枝もたわわに降りつめるけさの白雪見
とも飽かめや

ゆたかにも降れる雪かも高松の秀枝ほつえを見れば
かがやきわたる

あまぎらし降りくる雪はたちまちに降りこそ
つもれ庭松が枝に

晴れとほり春の來むかふ時にこそ白くかがや
け松のうへの雪

このあした眞白き雪をかかむれる松をよろし
み言祝ことばがむとす

松上雪 (三)

あかときとあけわたしたる松が枝はたわたわ
雪をいただきにけり

かぎろひの春のはだれはうつくしく降りこそ
つもれ庭の小松に

庭松をおほはむとするいきほひに流らひわた
るけふの雪かも

あまぎらし降りくる雪は見る見るうちに松の
太木たぎのうへにつもれる

きぞの夜の一夜ひよながらへし天つ雪はれにける
かも高松の上へに

松上雪 (三)

おごそかに雪をいたたく高松をすめらみ民の
こころともかも

しろがねとかがよふ雪はこのあした高松のう
へに降りつもりたり

老いらくのわれの心も清まれと降りつもりたる松のうへのゆき

老松がゆたかにかむる白雪を歩みとどめて見らくしよしも

とことはの潔きよきころとけさの朝け松につもれるこの白雪よ

松上雪 (四)

「松上雪」と題する歌ひとつ作りてこよひ心すがしも

わがこもる村をいで来て松原をおほへるみ雪見らく飽かなく

松はらにふりつみし雪みおろしてあはれ新年
をわが祝がむとす

たかだかと松の太樹まきの立てらくに雪ふりつみ
てあな嚴いづしよ

新しき年のけふ松の高きより雪ぞちりくる光
をうけて

ゆたけくもつもれる雪がおのづからしづまり
にけり松の太樹まきは

たかだかと聳ゆる松にあまぎらし流らふる雪
つもりけるかも

松が枝の雪を散らしてあはれあはれ雀がとも
もよろこびかはす

雪

をやみなく雪ふるときはわが身内しづかになりぬこのしづかさよ

午後一時の時計のおとを聞くころはしきりに
眠し雪の降らくに

あまぎらし雪はつもれどあららぎのくれなる
の實はいまだこもれり

藏王より北に延びたる山並の深けきひだをあ
ひめでにけり

新しく雪ふりつみて馬櫓のあと牛櫓のあとゴ
ム長靴のあと

ふかぶかと積もりし雪を戦車もて進駐兵は除
去しはじめつ

貧しきが幾軒か富みて戦をとほりこしたるこ
の村の雪

ほそほそとなれる生よ雪ふかき河のほとりに
おのれ息はく

農のわざつぶさに見つる一年をしむがごと
く村去らむとす

この村の媼おさよも九十二に間もなくならむ
ことをよろこぶ

ひびきつつ峽よりいづる冬川のさざれあらは
れて春立つらしも

朝の靄ひくくこめたる國土を北へ移りてわれ
ゆかむとす

この村をまからむとしておぼろなる日日ぞつ
づける春の立つころ

夜もすがら雪のしづくの聞ゆるを春さきがけ
と思ふべからむ

二つの山

あまのはらほがらほがらと全けくも二つの山
はあらはれて見ゆ 一月三日

月山は白くかがやき藏王山はなまり色なす雪
山ぞこれ

くすしくも冬の真中の空はれて二つの御山あ
ひむかひたる

雪あらび降りつもりたる二つ山今こそ見ゆれ
晴れにけるかも

ひさかたの空さだまりて楽しくも見ゆるもの
かも北の高山

空の八隅

杉木立ひびきをあげてゆふぐるるこの巖かに
堪へざらめやも

雪はれし丘にのぼりてふりさくる空の八隅は
いまだくもれり

ほがらほがら天あまのみ中なかの晴れくるを雪山ゆきやまの間ま
 ゆ見らくしよしも

とほどほし紫だちて明けわたる真冬まふゆの空に鴉
 は啼きぬ

雪ふぶく丘かたのたかむらすどくも片靡かたなびきつつ
 ゆふぐれむとす

小園をほり

後記

○

本集「小園」は、昭和十八年、昭和十九年の作から平和なものを選び、それに山形縣金瓶村疎開中の大部分の歌を加へて一卷としたものである。

はじめは、金瓶在住の歌のみを以て一卷とするつもりであつたが、それは歌數が少し足りぬので、戦争中の歌を加へることにしたのであつた。

本集收むるところの歌數は七八二首であつて、大體私の六十二歳、六十三歳、六十四歳の時に當る。

本集の名を「小園」としたのは、金瓶疎開吟のなかに、「小園せうゐんのをだまきの

はな野うへの上の白頭翁はきたくさのはな共ににほひて』といふ歌があるのに縁つた。

それから、本集には大石田で作つた歌をも共に入れるつもりでゐたが、頁數が餘り増加するので、大石田の歌は別に一冊とし、「白き山」と題して本集につづけることにした。

○

昭和二十年二月、山形縣上山にゐる舎弟山城屋四郎兵衛が、しきりに疎開をすすめるので、その相談のために十六日夜立つて十七日上山に著いた。談合の結果いよいよ疎開することとなり、金瓶村の齋藤十右衛門とも會つて手筈をきめ、三月六日、上山を立ち七日東京に歸つた。中一日置いて、九日夜に東京の大空襲があつた。以後用意をいそいだがなかなかはかどらず、

四月一日、義齒床の破損を發見したりなどして手當に日數を費した。しかし用意もそこそここにて、辛うじて四月十日東京を立ち、十一日朝上、山に著いた。

疎開の計畫は、山城屋で食事をし、近所に一室を借りてそこで寢起をするつもりであつた。然るに東京空襲のため、陸軍軍醫學校が山形に移動することとなり、山城屋も病室の一部に指定された。私は致し方なく金瓶村の齋藤十右衛門方に移動することにした。以後ずつとここに生活したが、十右衛門の妻は私の實妹でよく面倒を見て呉れた。併し、戦争がまだ續行中であり、十右衛門の長男は千島に、次男は沖繩に、三男はシンガポールにといふ具合で、特に沖繩の戦では、次男は戦歿の部類に考へられてゐた。

はじめは、農事をも少し手傳ふつもりであつたが、實際に當つてみると、

畑の雑草除が満足に出来ない。そこで子守をしたり、庭の掃除をしたり、些小な手傳をするのがせいぜいであつた。

五月二十五日の東京空襲で、青山の家も病院も盡く灰燼に歸した。私は明治二十九年、十五歳でこの村を出て東京に行つたのであるから、五十年ぶりで二たびこの村に住むこととなつたのである。同齡ぐらゐの人々の多くはこの世を去つてゐたが、おサヨといふ媼は九十歳を過ぎてまだ丈夫でゐた。この媼は私のために草鞋などを作つてくれた。

そのうち藏王山の雪も消え、全く夏になつた。東京の家が焼失したにつき、家内と娘が金瓶に免れて來たので暫らく一しよの部屋に住んだ。夏の部屋には蚤が多く、袋に入つて寝たりしたが、なかなか難澁であつた。しかし、病にかかるともなく一日一日が暮れた。

八月十五日には終戦になった。その少し前、神町じんまちといふところの飛行場を襲ふ編隊の通るのは、金瓶と藏王山のあひだぐらゐの上空であつた。その時に村では半鐘を鳴らしたが、萬事が過去つてしまつてゐた。

私は別に大切な爲事もないのでよく出歩いた。山に行つては沈黙し、川のほとりに行つては沈黙し、隣村の觀音堂の境内に行つて鯉の泳ぐのを見てゐたりした。また上山まで歩いてゆき、その裏山に入つて太陽の沈むころまで居り居りした。さうして外氣はすべてあらあらしく、公園のやうな柔かなものではなかつた。それでも金瓶村の山、隣村の寺、神社の境内、谷まの不動尊等は殆ど皆歩いた。さうして少年であつたころの經驗の蘇へつてくるのを知つた。

終戦後私は一度大石田の歌會に行つたのが縁で、毎月一度行くやうになつ

た。この歌集に大石田、最上川の歌のまじつてゐるのはそのためである。そのころ、アララギの發行も中絶したし、歌の註文もなかつたので、機に縁つて、手帳に歌を書きとどめておいた。本集に「疎開漫吟」として出したのはその大部分である。それから「金瓶村小吟」といふ五十首は、創元社から頼まれたために「邊土小吟」として一たび「創元」に公にしたものである。

そのうち新聞雑誌に歌を出すやうになつた。さうして秋になり、満山色づき、月山も藏王山も白くなり、金瓶村にも雪が降つて來て、少年のころ生活したと同様、私も冬の生活に入ることになつた。ふぶきの日には藏の一室に籠居し、天の晴れた日にはゴムの長靴などを借りて上山あたりまで往反した。私は金瓶村で昭和二十一年の新春を迎へた。

しかるに、司令部ですら戦歿の部類にあつた次男が無事生きて居るといふ

状報が入つた。長男も間もなく千島から歸るであらう。三男は未詳だが、これらも先づ先づ生きてゐるに相違なからう。かうして三人歸るとなると、私の疎開してゐるこの部屋を明けねばならぬ。さうしてその期限は一月一ぱいといふことになつた。これが、私の大石田へ移動した理由である。金瓶疎開中、齋藤十右衛門、結城哀草果、岩波茂雄、高橋四郎兵衛、金澤治衛門諸氏、其他から受けた厚意を感謝して止まない。さうして岩波茂雄氏が私の大石田疎開中永眠せられたことにつき甚深の弔意をささげる。

○

發行に當り、岩波雄二郎氏、布川角左衛門氏、榎本順行氏、玉井乾介氏から萬端の世話を忝うした。それから歌の清書は、ひとへに藤森朋夫氏、同洋

子嬢の手をわづらはしたことを感謝する。昭和二十三年秋、東京都代田にて。
齋藤茂吉。

納本

昭和二十四年四月十五日 印刷
昭和二十四年四月二十日 第一刷發行

小 圖
定價參百八拾圓



著 者 齋 藤 茂 吉

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三番地 岩 波 雄 二 郎

印刷者 東京都西多摩郡霞村根ヶ布三八五番地 山 田 一 雄

發行所 東京都千代田區 神田一ツ橋三ノ三

岩 波 書 店

會員番號A一〇九〇〇四號

落丁本・亂丁本はお取替いたします

株式会社大化堂印刷・製本

醫
本

終

